プラムディヤ・アナンタ・トゥール『人間の大地』ほか ブル島４部作

佐々木拓雄

1980年代の発表以来、わずかも色褪せることのないインドネシア文学の金字塔。世界の40以上の言語に翻訳され、著者プラムディヤは幾度となくノーベル文学賞の候補にもなった。押川典昭氏による名訳の恵みも受けて、わたしたちはこの壮大なスケールの歴史小説を心ゆくまで堪能できる。頁をめくればその世界に没頭させられ、読後の余韻はいつまでもつづく。10年、20年、あるいはそれ以上の時間を経ても。

舞台は20世紀初頭のオランダ領東インド。原住民エリートの学生である主人公ミンケが、さまざまな人との出会いを通じて新たな民族（インドネシア人）として覚醒する過程を描いた物語である。ミンケの成長をわたしたちは追う。アジア諸民族の独立へとつづく歴史の変わり目で迷い、つまづき、立ち上がるかれへの共感。かれと接する人々、とりわけ女性たちの、胸底をつらぬくようなことばの深み。わたしたちは、ミンケが変わり、世界が変わるその激烈で豊潤な時空に立ち会うことになる。

実在の人物をモデルとし、社会的な出来事も史実にそって描かれている。アジアの近代史を理解するための最良の導きともなる作品である。

写真：佐々木拓雄

出典:

ブル島4部作（邦訳：押川典昭、めこんより出版）

- プラムディア・アナンタ・トゥール『人間の大地』（1986年）
- プラムディア・アナンタ・トゥール『すべての民族の子』（1988年）
- プラムディア・アナンタ・トゥール『足跡』（1998年）
- プラムディア・アナンタ・トゥール『ガラスの家』（2007年）